

## ●無絃琴

(372) 我は愛讀す無字の書。我は聽かんとす聲なきの聲。たゞ獨り閑居に籠りて天地無韻の聲を聽く、これわが無絃の琴を彈するなり。この樂しみや、口これを言ふべからず、文字これを絃すべからず。

## ●昏倒せむ

信仰を有せずして信仰の功徳を語る者あり。信仰を味はずして之を味ひたるが如く説く者あり。又、單に己れの想像を以て己が實驗の如く言ふものあり。斯の如きは人を欺き、又、自己を欺く者なり。彼れ若し靜かに自己を顧みば、無限の空虚に襲はれて昏倒せむ。

## ●田舎と都會

(373) 田舎の風光は面り神に接せしむるの感あり。大自然の美は永劫に儼存して、人をしてその偉大と靈妙とを感せしめ、この汚され易き心を淨化せしむ。自然を悦しみ靈を求むる人の田舎を愛するはこの故なり。然るに田舎の男女は、田舎生活を嫌ひて都會生活を羨む。彼等の心事解すべからず。肉の樂しみを逐ふ者は都會に集り、靈の糧を求むる者は田舎に去らむとす。

## ●知らざるのみ

凡てのもの其極致に達すれば宗教となる。花の美も其奥には云ふ



に云はれぬ或ものあり。戀の情も其最高點に達すれば無限の音信あり。宗教は即ち茲に存す。思ひを深うすれば、處として神祕の境ならざるはなく、物として宗教の妙趣を湛へざるはなし。聖書に曰く、天は神の聖座にして、地は神の足躰なりと。豈それ天地のみならむや。一物も玄ならざるはなく、一物も神ならざるはなし。人は皆神の懐にありと雖も、皆たゞこれを知らざるなり。

●趣味なき人

趣味なき人の言ふところ、行ふところ、爲すところ、皆俗ならざるはなし。

金持ちに趣味の人は稀なり。彼等は多く金を費して以て興す。そ

こに趣味ありと云はむも、彼等は趣味の心を以て之を費すにあらずして、驕に得意の満足を購ふなり。これ趣味の人の彼等を嗤ふ所以。

●信條なき宗教

信條もなく、儀式もなく、教會もなき宗教、これ我が宗教なり。こゝに眞の信仰あり。

信條に據り、儀式に従ひ、教會に籠るが如き宗教は、これを信すと雖も眞の信仰にあらずして迷信なり。迷信とは必らずしも偶像を信することのみにあらざるなり。



●決心は事實也

決心は事實なり。空名にあらず空想にあらず。一度決心する時は、事未だ成らずと雖も、已に其事成就せりと思惟すべし。時未だ到らざるも、已に之を過去と觀じて可なり。意志の人、信仰の人は皆斯の如し。

●自然は萬能の醫師

自然は萬能の醫師なり。病あるものは自然に行け。信じて自然に頼れ。飽くまでも自然を信頼せよ。

此身を自然に一任して、生死を自然の手に委し、自然に殺さるゝも、之を本望とし、最後まで自然に就け。自然は決して己れを信ずる者を欺

かず。且つ又、之れに恥を加ふることなし。凡そ信ずる者は必らずその信に生き、その信仰によりて身を保護するものなり。たゞそれ自然を信せよ。

自然はあらゆるものを治癒せしむ。たゞに病のみにあらず。煩悶も、苦惱も、不平も、艱苦も、皆これを慰撫し、療治し、恢復し、生起せしむ。自然に頼るものゝ強くして、榮ゆる所以、實にこゝにあり。彼は萬能の醫師の保護を受くるを以てなり。

●病も亦賜物なり

病は神の課し給ふ試みなり。神は病によりて我を試み給ふ。神は之によりて我信仰を試み給ふ。之によりて我が謙遜を試み給ふ。之

決心は事實也、自然は萬能の醫師、病も亦賜物なり



によりて我が忍耐を試み給ふ。神は此の試みを終るや、即ち之を去り給ふなり。我はかくして病も亦神の賜物として感謝せむかな。『我は我が弱きに誇らむ。』と云へる古人の心は、正にこの心ならむか。

●始めより孤獨なり

神を知り神に知らる。此の知己のみは決してイリュージョンにあらず。人間界の友は的にならぬ者多し。友と見ゆる者も徐かに之を見れば友にあらず。皆狸のみ。狐のみ。我には一人の友あるなし。友ありと信じて失望せむよりは、友なきを自覺して、淋しき孤獨の生涯を送らむこと、之れ我が願ひなり。人は皆孤獨なり。始めより孤獨なり。事實に於て、孤獨なり。之を

自覺せずして多くの友ありと思ふ人は憐れむべし。見よ人は皆、個々別々己れの事のみを思うて、活くるにあらずや。汝の爲めに泣き、汝の爲に笑ふ者何處にありや。唯天を仰ぎて神に汝の知己を求めよ。これ汝の力なり。光なり。生命なり。

●以て光榮とす

我は鮮やかなる日より雨の日を愛し、得意の人よりも失意の人を慕ふ。笑ひ興ずる人よりも、憂ひ悲しめる人に友たらんことを願ふ。我は人と語るよりも、寧ろ獨り語るを樂しむ。而して我が無上の快樂は、我心の奥に分け入りて、深き悲哀の涙を味ふにあり。人は我を評してヒネクレ者と評せむ。然れども我は俗輩より斯く評せらるゝを以

始めより孤獨なり、以て光榮とす



て光榮となす。

●これ偉人也

心に思ふ事をその儘云ひ得る人は一人もなし。人は皆表と裏とに生くる怪物なり。若し思ふ事を常に直言し得る人あらば、是れ即ち偉人なり。

●至誠

如何に聲を大にし咽喉を破る迄も絶叫すと雖も、内に至誠なければ、これたゞ咆哮のみ、怒號のみ。人何ぞこれに感せんや。如何にその力を盡して働くと雖も、心に至誠なければ、これ徒勞のみ。何の實も結ぶことなし。

野に立ちて聲を擧げず、閑處に退きて沈黙すと雖も、内に至誠ある者は、その感化四海に及ぶ。要は内に至誠を養ふにあり。汝自らこれを顧みよ。内に果して幾何の誠ありや。何程の信ありや。

●宗教の二方面

宗教に二面あり。一は形而上の宗教にして、他は形而下の宗教なり。形而上の宗教は精神として存在し、精神として發達す。形而下の宗教は制度として存在し、制度として發達を遂ぐ。而して此二者は相反す

これ偉人也、至誠、宗教の二方面



るが如くにして、決して相衝突するものにあらず。共に宗教として一  
 如たり。之を例するに松樹を以てせむ。その根は地中に入りて深く  
 下向して發達するに反し、その幹は反つて上向して高く天に向つて發  
 達す。その發達の方同相異りと雖も、元これ一本の松なり。形而上の  
 宗教は松の根に均しく、形而下の宗教はその幹に等し。形而上の宗教  
 は眞摯敬虔の精神を主として無形の發展をなすが故に、匿れて人目に  
 現せず。形而下の宗教は拜禮儀式を主として、有形の發達をなすが故  
 に、顯はれて人目に影す。

●天地の大廟

一日早起、天地を觀すれば、天は晴れて大空一碧一點の微雲だになく、

地は穩やかにして綿絮を掃ふ風だになし。寒からず暑からず、涼氣云  
 ふばかりなし。松は翠りに小鳥は嬉々たり。美なるかな天地麗なる  
 かな自然此間に介在する我は、赤兒の慈母の懷に抱かるゝの思ひあり。  
 靜かに心を潜めてこれを思ふ時、我の小なるを知つて、没我の境に入り、  
 彼の大自然を感じて、敬虔の念に満たさる。

何事のおはしますかは知らねども

忝けなさに涙こぼるゝ

西行は伊勢の大廟に詣で、この尊き涙を流せり。我は今この嚴肅  
 幽玄なる天地の大廟を拜して、亦此感を同じうす。宗教とは即ちこの  
 心ならむ。



● 信念

信念とは何ぞ。各自が其心の奥底に有する或理想あり。此理想に對する眞摯謹嚴の精神これ信念なり。此理想を信すること己が存在よりも強く、此理想を貴ぶこと、全世界よりも重く、此理想によりて活き此理想によりて動き、此理想の爲には生命をも捨つるの精神、これ即ち信念なり。またこれを宗教といふ。

『神は至誠の一念に來格す。』其理想は必らずしも神と謂はず。佛と謂はず。天にても可なり。道にても可なり。本心にても可なり。一個の抽象的觀念にても可なり。己が一生の使命にても可なり。その何たるを問はず、その理想がその人の實生活を支配する確乎不動の勢力ならばこれ即ち信念なり。此種の信念は、基督の所謂信仰なり。山

に命じて海に入れと云は、山之に従ふ的の信仰なり。然るに世の所謂宗教家の信仰は一種の知識(オピニオン)に過ぎず。『我は神の存在を信す』『我は未來を信す』『我は基督を信す』などいふ此種の信仰千百ありと雖も、それ遂に何の益かあらむ。

● 無名の大道

我に一の大道あり。我はたゞこれを進む。人これを何ぞと問ふも、我これに答ふる能はず。これ無名の大道なり。此大道は無言無聲の中に自ら自らを流宣し行く。時もこれを犯すべからず、天災もこれを厄すべからず。無名の大道は悠々不斷の進行を續けて止まず。人之を嗤ふものあり。譏るものあり。嘲るものあり。此の如き人

信念、無名の大道



はこれ天に向つて唾すると同じ。自らその顔を汚すのみ。

(386)

### ●心の瘡痕

心に瘡痕なき人ありや。若しそれなき人あらば、これ誠に幸なり。心に瘡痕ある人は、一日も早く此の瘡痕を根治せざるべからず。然れどもこの瘡痕は容易に癒えざるものなり。癒ゆと雖もその瘡痕は永く止まりて去らず。而して此の瘡痕を見る毎に、思ふ毎に、昔日の痛苦も亦復活し來る。禍なるかな。

心に瘡痕あれば臆病となる。善事をなすと雖も、なほ偽善の如く思はれ、眞を言ふと雖もなほ虚偽の如く響く。他人の耳には眞と響くこと、雖も瘡痕ある人の耳には虚偽の如く響く。斯して心に瘡痕ある者は、臆病となり、卑怯となり、怯懦となり、拗ね、ヒネクレ、曲り、虚偽の人となるなり。心に瘡痕ある者は、こゝに大に警めざるべからず。心に瘡痕なき人は、この事を思ひて自ら慎まざるべからず。

### ●宗教の門外漢

(387)  
宗教は、危険、心證實踐、體察によらずんば之を知ること能はず。これ無くして世の智慧や、學識や、理窟や、常識を以て、如何に之を捏ね廻すと雖も、之を解するを得ざるなり。哲學者や、倫理學者や、政治家や、實業家や、宗教學者や、彼等は遂に宗教の門外漢のみ。彼等の言語は風の如く軽く、水の如く冷かなるまた怪しむに足らざるなり。然れども、宗教の門外漢は、これ等の人々のみならず、自稱宗教家の間にも之れ有り。宗

心の瘡痕、宗教の門外漢



祖や教會制度や、神學や、儀式や、信仰個條や、聖書經典等に執著する連中は、皆是れ宗教の門外漢なり。  
 宗教は崇高にして超自然的深奥にして神祕的生命なり。之を味ひ之に參じ、之を體得する人のみ眞の宗教家なり。大方の所謂宗教家は、皆是れ宗教の門外漢のみ。

●寂寞なる生活

宗教の甘味を知らず、宗教の神祕を知らず、宗教の生命を知らざる人の生活は如何に寂寞たらずや。而して其の寂寞をすら之れを知らず、またこれを感じせず、空の空なる物質のみを得て自ら満足する人々は憫れなるかな。

●靈化せよ

現實は誘惑を以て我を俗化せんとする傾向あり。我は理想を以て現實を靈化せずんばあらず。  
 良心は先天的なるか後天的なるか。良心は人間生れ乍らにして有する天賦の力なるか、將又良心は人間の經驗より生じたる、一種の習慣法に外ならざるか。是れ大いに攻究を要するの問題なり。我は進化の神を信ず。進化の結果此良心の生じ來れるは、正に是れ神の發現なりと信ず。

要するに、我等の中心には動かすべからず、抗すべからざる理想の力即ち、世の所謂良心、陽明の良智善能或は靈根なるものあり。此の力は常に世を善化し、聖化し、靈化しつゝあるなり。吾人は、ヒューマニチー

寂寞なる生活、靈化せよ



の中に存する此力に合して、向上的潮流を増大するを努むべきなり。我は、マスターアノルドと共に、『我ならざる永遠の正義』の實在と活動とを信じて疑はざるものなり。

●蛙人

藩主邸に祝宴あり。我が曾祖父その主座に即く。列席の諸臣皆綺羅を纏ひて威儀を正せるに、曾祖父一人綿服を以て端然として坐す。衆皆之に恥ぢて、藩内之より奢る者なし。

曾祖父に子なし。養子を迎ふ。養子ふと煙草に興味を感じ、一日市に出で、煙草入れを購ひ来る。曾祖父之を見て曰く、『一寸それをお見せ。』と。養子煙草入れを手渡す。曾祖父即ち之を庭池中に投じ去

る。養子之より煙草を嗜まず。

曾祖父は質素實直剛毅果斷の人なり。最も驕奢を忌む。先天的の武士にして、實に武人の典型たり。體格偉大にしてその佩ぶる處の太刀は、常に刀身二尺六七寸以上なるを擇べり。源家古法の兵學に通じ、又文人なり。著書多し。天性器用にして美術的技術あり。彫刻を好んで多くの作品を遺す。

曾祖父は實に村井家の偉人にして、名を村井知衡といふ。我今日あるもの全く曾祖父の人格の感化に依らずんばあらず。我親しくその面容に接せざりしと雖も、少時よりその人格逸話を耳にし、之によりて勵まされ之によりて誠められぬ。

庭に海棠あり。毎年花落つる毎に、曾祖父は手づから之を拾ひ、日に乾かして紙袋に入れて貯ふ。而して常に曰く、我若し死せば、此の花を



以て我を棺中に納めよと。

八十歳の頃自ら墓碑を作りて裏に辭世の歌を刻む。而して豫めその墓所とする處にこれを建つ。

曾祖父は毎朝木太刀を揮ふことを以て日常の運動となす。九十三歳の折例の如く早朝褥を離れて木太刀を揮へる時、忽然として永逝す。病なくして天命に果てたるなり。

曾祖父極めて蛙を愛し、庭中に多くこれを養ふ。夏に至れば、毎夜杖を把りて庭に降り立ち、しみく蛙の鳴聲を味ふを以て樂みとせり。その自畫像に、杖つける曾祖父が、一匹の墓を肩に載せ、一匹を懷に抱き、一匹を手にして、墓を味へるものあり。蓋し曾祖父は眞にこれを悦し、みたるが如し。

我、我が雅號に『蛙人』と選べるは、即ち曾祖父のこの逸話に因める

なり。而して我も亦蛙を愛すること、曾祖父に譲らざるものあればなり。

雅號蛙人の由來に附言すべきものなほ一あり。我嘗て某處に避暑す。巷の俗衆に倦きたる我は、靜かに閑寂の田園を味はんとせるなり。然るに宿の女將、我つれづれなるべきを思ひて、暇ある毎に來つて、課々として語つて止まず。我遂にこれに堪ふる能はず、常に杖を引きて野に出でたり。一夕即ちまた難を避く。蛙を傳ひ小徑を辿れば、蛙聲しきりに耳に迫る。感興堪へ難きものあり。生れてはじめて句を作る。

倦き／＼て蛙に知己を求めけり

と。此時雅號を定めんことを思ひ、曾祖父を偲びて、即ち蛙人となせり。



●物 來

莊子曰、

『一年而野。二年而從。三年而通。四年而物。五年而來。六年而鬼入。七年而天成。八年而不知死。不知生。九年而大妙。』

我雅號の一たる物來は、『この四年而物五年而來』の物と來とを取れるなり。

莊子の此の言は、見性悟入の道程を言へるもの、その四年而物の物とは、我が腹の奥底に、何ものか一物の宿り來るを言ふものして、五年而來の來とは、この腹に宿り來れる一物より、生命が滔々として湧き來るを言ふ。我が此の二文字を撰べる所以につきては、我が靈的經驗の一部

を語らざるべからず。

我は嘗て宗教上の疑問に囚はれて、非常なる苦痛と煩悶に會したることありき。此の苦痛と煩悶とは、日に日に募りて、此の疑問の解決せられざる間は、此の生活に堪ふる能はざるに至れり。明治四十二年十月二十一日の頃より、愈々此の大疑問の苦痛に堪へず、年末の繁忙をも忘れて瞑想苦考、夜臥床の中にある間もこれを想ひ、これを考へ、之が爲に神經興奮して安眠も叶はず、身體は日に日に衰へ、精神は茫乎として自他を辨せざるに至れり。大晦日の日に至つて遂に堪ふる能はず、家を出で、大森の田圃を逍遙し、ふと松村介石君の宅に立寄るに、君我顔を一瞥して、『顔色甚だ勝れず。如何したるか。先づ碁を圍みて氣を散せよ。』と。言はるゝが儘に碁盤に對せしも、我心我にあらず、遂に石を棄て、歸宅す。家に歸りて直ちに床を延べさせて臥す。其夜も茫



乎たる精神の間に苦悶を重ねて一睡もせず、何時か夜は明けたり。

床を離れて洗面を終り、書齋に籠りて机前に端坐するに、何となく心

静まりて、何時とはなしに、又何とはなしに、祈禱する氣になりぬ。此時

の精神状態は、パウロが『聖靈言ひ難き歎きを以て、我等の爲に祈る。』

と云へるが如く、我ならざるもの來つて我をして祈らしむるにありき。

我は我が口より、我ならざるものが湧き出で、祈り居るを自覺せずし

て、たゞ神の教へ給ふがまゝに祈れり。その祈りの時間の幾時間

なりしか、又、祈れることの何なりしか、我はこれを知らず。たゞそれこ

のスウプリーム、モーメントに於て、我が精神は茫乎として、遂に無意識

に倒れぬ。此の瞬間に我れならざる或物——何物か我に來つて我が腹

に宿れるを思へり。而して此時に於て靈界の大光明に接したるなり。

勿論こは目に見たるにあらず。是を言葉を以て言ふは難きも、若し之

を言へば眞知と云はむか。人の所謂大悟に會せるを覺えたり。

此の經驗を経て後、我が靈的自覺を語る言語は、凡て聽く者に對して、

一種の靈感を與ふるを實驗して、我が經驗の極めて貴きものなりしこ

とを知れり。而して、此時の我は身體全く疲弊して、轉地靜養の必要な

るを説かれ、遂に明治四十三年正月三日、豆州修善寺に遊べり。

我は修善寺に於て、或る仕事をなさん考へなりしも、如何にしても之

に手が著かず、たゞ瞑想の日を過せり。而してこゝに又一日、彼の先日

に於けるが如き經驗を再びし我を忘れ自失して倒れぬ。此時再び大

なる靈的閃光に觸れ、我が心靈の自覺は確然として徹底せり。信仰の

生活を求めて三十餘年、自ら神の道を得たりとなし、信仰の堂奥に徹せ

りと思ひ、教を布き道を傳へんと努力して、然もなほ衷心宗教上の大問

題に觸れて煩々悶々、焦慮苦思の末は遂に昏倒して自我を忘却し、辛く



して一道の光明に接して力をこゝに得、更に努力して冥想苦悶の間に  
 朝暮し、健康を害ひ心身を疲らして茲に到り、はじめて『四年而物。五  
 年而來。』の經驗に會するを得たり。難い哉信仰に入ることや。此時  
 即ち物と來との二字を取りて我雅號となしぬ。

聲  
終

大正五年十月廿八日印  
 大正五年十一月一日發行

大正名著文庫第廿七篇

不許複製



定價壹圓參拾錢

著者 村井知至  
 發行者 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地 加島虎吉  
 印刷者 東京市本所區番場町四番地 岡功

發兌

東京市日本橋區  
 本石町三丁目  
 東京市日本橋區  
 人形町通住吉町

電話本局長三六六番二一六七番  
 振替口座東京一七四四番  
 電話浪花一九四九番  
 振替口座東京三六六四番

至誠堂書店  
 至誠堂小賣部



# 辭書界の權威

井上十吉先生著

## 井上 英和大辭典

五萬部限特價貳拾圓 郵稅拾貳錢

附錄數十頁・紙數萬・本文二千三百二十六頁  
 附錄十頁・縱五寸六分・橫三寸一分  
 總口スロ特製◆定價貳拾五錢◆

井上十吉先生心血を凝ぐ實に七箇年

英語學上必須の三大條件  
 第一に 己の努力  
 第二に 良師の誘導  
 第三に 本書の使用  
 これは動かすべからざる真理として學者の一致する所なり第一第二は云ふまでもなく第三また決して誇張の言に非ず確固たる事實なり何となれば己の良師とて次では辭書の效力を最とすべく而して辭書中の辭書は實に井上英和大辭典なれば也

全國各學校に於て指定辭書

何故に本書は  
 辭書中の  
 なるか  
 ◎語數の豊富 ◎新語の包有 ◎なる點に於て一切の類書に冠絶するが故なり  
 ◎譯語の明確 ◎發音の正確 ◎於て一切の類書に冠絶するが故なり  
 ◎文例の懇切 ◎檢索の至便 ◎於て一切の類書に冠絶するが故なり  
 ◎註解の網羅 ◎編纂の巧緻 ◎於て一切の類書に冠絶するが故なり  
 ◎熟語の詳解 ◎印刷の鮮明 ◎於て一切の類書に冠絶するが故なり  
 ◎術語の詳解 ◎製本の堅牢 ◎於て一切の類書に冠絶するが故なり

眞個絶大なる精力の結晶體として本書大成す

# 龐然大著縮刷至便

文學博士三宅雪嶺先生著

## 改訂 縮刷 思想 痕

書を讀むは猶山に登るが如し、其愉快は眼界を濶大にし氣字を高朗にするにあり。山に登らば當に大山に登るべく、書を讀まば須らく良書を讀むべし。三宅雪嶺先生は嶄然思想界に峙立す其識は天漢を貫き其學は地表を掩ふ。玲瓏の人格巍々たる徳操、雪嶺と號するの有名有實たるを見る先生の人格が一代の敬仰を受け先生の著書の上下に渴讀せらるゝ誠に所以ある哉。先生の著皆學術界、思想界の權威たりと雖も、最も良く文明批評家たる先生の特色を代表する者は「思想痕」を推して第一とす「思想痕」は先生三十年間の思索の結晶にして宛然雪嶺全集の觀あり篇を分つこと七篇章篇約三百、山濤海嶽變幻の妙を極め筆端白雲を起し紙上清風を生ずるの感あり而して其取材の廣汎にして多趣多端なる有らゆる階級の有ゆる人士をして必ず會心の文章を發見せしむべく一文を讀む毎に一段の識見を増すを覺えしむべし。加ふるに博士の文は獨創的にして清新の氣充溢し含蓄極めて深きを以て文に志あるの士日夕本書を精讀せば必ず著しき進境を見るを得べし。

東京市東區本町一丁目三六六番電話本局三六一番電報局六四七番

發兌 東京市東區本町一丁目三六六番電話本局三六一番電報局六四七番



# 辭書界の權威

井上十吉先生著

## 英和辭典

五萬部限特價貳圓廿錢 郵稅拾錢

語數廿萬・紙數本二三千二百六十一頁  
 附錄數十頁・縱五寸六分・橫三寸一分  
 總口ス製特◆定價貳圓五拾錢◆

井上十吉先生心血を凝ぐ實に七箇年

英語學  
 上必須  
 の三大  
 條件

第一に 自己の努力  
 第二に 良師の誘導  
 第三に 本書の使用  
 此は動かすべからざる真理として學者の一致する所なり第一第二は云ふまでもなく第三また決して誇張の言に非ず確固たる事實なり何となれば自己の良師とては辭書の效力を最とすべく而して辭書中の辭書は實に井上英和大辭典なれば也

全國各學校に於て指定辭書たるの光榮を受く

何故に  
 本書は  
 辭書中  
 のなるか

語數の豊富  
 譯語の明確  
 文例の多  
 註解の懇切  
 熟語の網羅  
 術語の詳解  
 新語の包有  
 發音の正確  
 檢索の至便  
 編纂の巧緻  
 印刷の鮮明  
 製本の堅牢  
 於て一切  
 の類書に  
 冠絶する  
 が故なり

眞個絶大なる精力の結晶體として本書大成す

# 英學界の福音

井上十吉先生著

## 英和辭典

縱スル百  
 五特活餘  
 寸製字頁  
 横携印假  
 二帶刷名  
 寸至鮮付  
 五便明挿  
 分新紙畫  
 總式數五  
 クナ壹百  
 ロン千餘  
 一八四個

父兄諸君！子弟に辭書を與ふる時第一内容の選擇に在

本書が中學生用の辭書として完全無缺なるは弊堂の確信して疑はざる處本書の諸君に於けるは恰もプロペラの飛行機に於けるが如し殊に出色の特徴として誇るべきは中學生諸君に對する懇篤なる先生の温情が書中到處に流露せることなり單に文字を排列せる冷かなる辭書としてよりは寧ろ温かき師友として坐右寸時も離すべからざるものならむ

定價金壹圓參拾錢

郵送料 金 八錢

本書の特色

- ◎教科書中の語句の網羅
- ◎假名應用發音法の完成
- ◎譯語の平易解釋の正確
- ◎熟語及び慣用句の夥多
- ◎最新語の豊富なる收載
- ◎文法上説明の周到懇切
- ◎略語他國語の本文排列
- ◎重要な固有名詞の詳解
- ◎振假名と挿畫との豊富
- ◎内容の充實容積の輕便

最新最善最便最廉の完全なる英和辭典現はる











大正著名文庫

第三十編 長谷川如是閑先生著 搦手から 裝幀 大野靜方畫伯

第二十編 大内青巒先生著 破木杓 裝幀 大内青巒畫伯

錢八金各稅郵 錢拾參圓壹金册各價定 裝美製特判六四

—(班一評世)—

つ之横奇す▲たの云所せ地ユあ▲ 者な盜想る日扶程へのるをウる時 と本せを總本らにば者所作モ創事 云書き織て及る置安た文リア作新

—(班一評世)—

端淡▲能談▲なもるら迷書よ著▲ とな報く話中開の眞れなり者▲ なる知萬あ央悟は理ざらい清は事

市京東 町石本 堂誠至 電話本局三六六番 電話本局三六六番 電話本局三六六番

大正著名文庫

第十一編 加藤咄堂先生著 人の心 裝幀 川村清雄畫伯

第十編 文學博士 前田慧雲先生著 活修養 裝幀 川村清雄畫伯

錢八金各稅郵 錢拾參圓壹金册各價定 裝美製特判六四

班一評世

で識を心巧ふの採な靈者◎維現と◎ はら以のみべ努りり妙一萬微代を太 能ずて主にき力て材の流朝との觀陽

大正會通の四書學子書査る 日本於本振て若 一年爲教に日 全一め育於本 級の級全一め 修青國月大振て若 審養年中本正興普

◎讀賣新聞曰く 思ふに是れ最近の出版物 萬人の座右に缺くべからざる現代の知識と 人か◎萬朝報曰く 深奥なる佛敎の論語なら 必要なる先賢の遺蹟とを引きて吾人の日常生 宗敎界の宿題たる道徳を説きつゝ國民新聞は

市京東 町石本 堂誠至 電話本局三六六番 電話本局三六六番 電話本局三六六番



大正名著名文庫

醫學博士 森岡外先生著  
第四十編  
妄人妄語  
裝幀 川村清雄畫伯

前田慧雲先生著  
第五十編  
楽しい人生  
裝幀 川村清雄畫伯

錢八金各稅郵 錢拾參圓壹金册各價定 裝美製特判六四

—(世評一斑)—

▲國民新報曰く、藝術を論じ、倫理宗教を説き、又文明を批評す、深き造詣と洗練されたる行文と兩々相俟つて卷を措く能はざらむ。……  
▲大阪朝日新聞曰く、巻頭の妄人妄語は、最近歐米文藝社會の新聲を傳ふると同時に鋭いアイロニーが現はれて居り故人長谷川二葉亭を追憶した一文には何とも云へないあつさりした面も温い情緒が溢れて居る、新舊の劇に對する理解された評論や、メテリック氏の思想を説きハワプトマンの新作を論評した文章などは、是非一讀すべき忠實なる紹介である。……  
▲東京毎日新聞曰く、文壇の巨匠たる著者が最近二十年間に亘りて物せられたる名論卓説を蒐めたるもの、各篇皆著者の該博なる學識の横溢するを見る。……

仁義地を掃ひて、道德方に廢頽せんとす、これ現代の趨勢に非ずや。憐れむべし、舉世煩悶懊惱して其の歸趣する所を知らず。此時に當りて、樂地を拓き、以て人を指示するに足るは、先生の本書を推さざるべからず。先生博學多識、諄々として説き、懇々として論ず。大道に徹底して趣味津津たり。之を讀む者、何人か嬉々として樂まざらん、又何人か樂觀裏に成功せざらん。「活修養」と共に修養の寶典處世の羅針盤なり。

東京市東本町 發兌 至誠堂 電話 本局三六六番 東京市東本町 發兌 至誠堂 電話 本局三六六番

大正名著名文庫

文學博士 幸田露伴先生著  
第六十編  
悦樂  
裝幀 川村清雄畫伯

加藤咄堂先生著  
第七十編  
旅から旅  
挿畫 結城、石三畫伯 井平福

錢八金各稅郵 錢拾參圓壹金册各價定 裝美製特判六四

—(世評一斑)—

◎時事新報曰く、雄偉高傑の人格者たる著者が博大高邁の學識を貫徹し、悦樂「不愠」「無益」の四章を成す言辭珠玉の如く立意深遠醇乎として學を勤むる所眞に現代文壇の偉觀たり學識洽博一々其の出處を注記せるは著者の深切感謝すべく其他の文章並に滑稽談も著者の洽識を以て始めて成る所吾人は本書を目して大正の新勸學篇と謂ふに躊躇せず學生諸子に取りて以て新秋研學の資にせんことを切に薦む。……  
◎萬朝報曰く、學を修むる者の爲に個中の滋味を説けるものにして老婆心且つ嗜み且つ味ふべし後半は日頃書き溜めたる隨筆を一括し遙かに「瀾言」「長語」に對す。……

—(世評一斑)—

◎萬朝報曰く、二十年間の旅行に得たる所を結集したる一種の日本風景論或は山水美論にしてまた人國記的分子を有す足跡殆んど海内に普く時節柄願る繙讀に適す。  
◎東京朝日新聞曰く、「山水美論」に於て瀾瀾の文能く自然の美觀を描き得「江山の傳説」にて各地の口碑傳説を採録し「名蹟史蹟」に於て宗教文學其の他趣味ある史上の事蹟に及び終りに「東京風俗」「風土人情」の二篇に於て東京を中心として各地の風土人情の洞察に及ぶ著者二十年來旅から旅の生活は足跡殆んど天下に遍く其の親しく見聞する所之を典籍に證し獨得の才筆記述頗る興趣ありまた以て著者の所謂「流風遺俗を見る」の資とすべし挿むに素明、柏亭、百穂三氏の畫を以てす。……

東京市東本町 發兌 至誠堂 電話 本局三六六番 東京市東本町 發兌 至誠堂 電話 本局三六六番



大正著名文庫

菊池幽芳先生著

幽芳集

川村清雄畫伯

浪六先生著

放言錄

裝裝及口繪者自作

錢八金各稅郵 錢拾參圓壹金册各價定 裝美製特判六四

斑一次目容内

停電、歐洲の列強、大膽、秋、蚊、人の言はんと欲して、言ひ得ざると、こゝろ、言ふを憚り、言ふを恐れて口に吐き得ざるもの、之を社會一般人生全部に涉りて遺憾なく最も大膽に無遠慮に吐き出せしむる即ち本書なり。

文壇の權威たる幽芳先生が佛國留學中に於ける見聞小品より最近の作品に至る近業を網羅せるもの、短篇小説あり、翻譯文あり、小品あり、紀行あり、觀察あり、一たび幽芳先生の筆にかかると時皆一種のチャームを有し、讀者を魅し去らざるは止まず。豈し近來に於ける絶好の讀物なり、幽芳先生先に渡歐の途に上るや、梨木宮妃殿下と御同船の榮を得、殿下の知遇を辱うして「賀茂丸より」の一篇成る、日本皇室の御女性中最も美しくして機智縱横に渡らせらるゝ妃殿下を中心とするその樂しく華やかなる航海日誌また收めて巻尾にあり、幸に愛讀を給へ。

東京市東區本町一丁目 至誠堂 電話本局三六六番 東京市東區本町一丁目 至誠堂 電話本局三六六番

大正著名文庫

和法學博士 和田垣謙三先生著

西遊スケッチ

川村・繪及・押書 原色版、寫眞版、數葉

柳川春葉先生著

うき世 卷一

口繪及插畫、崎英朋畫伯、裝裝見返杉浦非水畫伯

錢八金各稅郵 錢拾參圓壹金册各價定 裝美製特判六四

世界未曾有の大動亂未だ収まらず苟も志ある者誰か魂を歐洲の天地に馳せざるものあらんや。和法學博士謙三、歐洲諸國を漫遊せらるゝや、其雄偉の人格、該博の學識、縱横の才氣、犀利の觀察は到る處外人を驚嘆せしめたるが、本書は即ち其間に於ける博士の感想録にして、風に江湖の翹望せし處のもの、各國の風俗習慣趣味藝術等に亘り片言猶よく其の微を聞き、篇々特殊の光輝と芬香とに富み、又博士の獨擅たる短篇——佳話格言詩歌翻譯等二百餘篇を收め、諧謔、警語、讀者をして或は哄笑せしめ、或は感泣せしめ、才華煥發星の如く、興趣横溢雲の如く、咳唾悉く珠を成す。兎齋錄、吐雲錄に於て門に及び堂に上りたる諸君は更に本書に於て博士の室に入らざるべからず。

本篇は大坂毎日、東京日々兩新聞に連載して満都の喝采を博しつゝある春葉先生最近の一大傑作なり、落魄せる華族の令嬢を渦中に投じて之に寡慾を配し、家庭の裏面、周囲の出來事、義理人情の波瀾萬藤より數奇なる運命に翻弄せらるゝ可憐なる令嬢の苦心慘愴たる心理を描述して、曲折變化を極め、愈々出で、愈々奇なる人生の祕曲は先生の靈筆によりて飽くまで讀者を魅し去らざるは江湖に推す。

東京市東區本町一丁目 至誠堂 電話本局三六六番 東京市東區本町一丁目 至誠堂 電話本局三六六番



大正著名文庫

夏目漱石先生著

金剛草

裝幀 津田青楓畫伯

柳川春葉先生著

うき世

口繪及挿畫 崎英朋畫伯  
表裝見返杉浦非水畫伯

六四特製美裝 定價各冊壹圓參拾錢 郵稅各金八錢

漱石先生は日本文壇の最高權威なり。其幽遠なる思想、博宏なる學術、靈活なる筆端より流出する藝術は尤も高級趣味を充たすに足る。本書は此最高藝術のエキースとも稱すべき者にして、既往十年に亘る先生の新聞作中より尤も會心得意の代表的傑作のみを選集し、以て評論、講演、小品、小説の四種に分類せり。『素人と黒人』、『ケール先生』等未だ何れの書にも收めざる新文字少からず、されば本書一卷を讀めば、以て先生十年の努力に成れる藝術と思索の核實を味ふに足るべし。苟も現代の文藝と思潮に志あるの士は乞ふ速に一本を購ひ給へ。

可憐の少女早苗の運命は如何になりゆきぞ！ 娘持つ親は讀め、兄も弟も姉も妹も來つて此浮世の痛ましき旋轉を見よ、悲愁は歡喜に次で來り、憤怒は哀憐と共に生ず、叙述の展開と共に讀者の感情も今や高潮に達せずんば止まず、曩に大阪浪花座に上場せらるゝや京阪人士爲に熱狂し、近者再び東京明治座に開演せられ滿都好劇家の期待を實現し、劇界人氣の焦點となる、劇中省略せられたる幾多の波瀾紛糾は本書を俟つて初めて瞭然たり、劇を観たる諸君も觀ざる諸君も共に本書に於て劇以上の劇的情緒に陶醉せらるべきなり。

東京市東區本町一丁目 至誠堂 電話本局三六一番 電振替東京一四七番 發行

大正著名文庫

柳川春葉先生著

うき世

口繪及挿畫 崎英朋畫伯  
表裝見返杉浦非水畫伯

文學博士 井上圓了先生著

迷信と宗教

裝幀 中村不折畫伯

六四特製美裝 定價各冊壹圓參拾錢 郵稅各金八錢

本書は博士獨得の研究にかゝる迷信と宗教との本領を明示せる新著なり、先づ西洋の迷信より説き起し、印度、支那、朝鮮、臺灣、琉球及び五畿八道に於ける各種の迷信に就き、博士が實地見聞せる事實を列擧し、之に説明を附し評論を加へ、最後に迷信の暗雲を破りて宗教の光明を開かれたれば、家庭教育社會教育の好資料たるは勿論民間に於ける平素の座談茶話の修養的材料としても亦最適必備の名著なり。

●曩に大阪浪花座に上場再び東京明治座に開演深刻なる描寫の筆は本書に於て其極點に達し、悲絶慘絶浮世のどん底を讀者の眼前に顯はし來る。窮窮更に窮窮老父途に狂筆し、家貧にして孝子あり文雄の至情鬼神を哭かしめ、弱き者破れ易く早苗將に高森に嫁せんとし、美しき者痛み易く名女優の人氣地を掃ふ。萬事已に休みたる乎、否、聞け快漢栗原の力ある聲音！更に開け天の一方に空中征服のプロペラの響——眞木原式飛行機の成功——眞木原増穂の大成功！今や極端なる暗黒は極端なる光明に轉ぜり、すべての面上狂喜の色あり、枯木再び花開き實を結ぶ。

●好劇家の大喝采を博し劇界人氣の焦點となる

東京市東區本町一丁目 至誠堂 電話本局三六一番 電振替東京一四七番 發行







新譯漢文叢書第一編

大町桂月先生譯評  
新譯  
日本外史

袖珍三五形美本  
定價金一圓五十錢

特小 價金 壹圓 拾八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を踏むが如く大義爲めに明かに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文叙事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇抜痛快の批評を加ふること數百條山陽が當時を憚りて言ひ得ざりしことまで遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む觀殊に奇一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閉却して自から寶を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編

陸軍教授  
友田宜剛先生評解  
新譯  
文章軌範

本文新式ゴヂツク活字  
袖珍三五形携帯至便

正小 價金 壹圓 拾八錢

作文に志す人は必ず文章軌範を讀まざるべからず明治作文教授の泰斗友田宜剛先生が十年の心血を凝ぎたる研鑽の光燦爛として新譯評解文章軌範は世に出たり其の譯其の解其の評最も斬新最も適切最も明文章の模範化したる點に於ては比類無き無限の光榮を擔へり今其の特長を一言せんか●從來の漢文讀みの通弊たる文法の誤りに深く注意し假名一字をも疎略にせず本文を離れずして而も純粹の明治的文章化せしめたる事其一也●各文の始めに作者の略傳大意等を附し讀者をして興津々喜んでその文の迎へしむること其二也●各節各段に口語文及語法演説の模範たりしめ文法は各編末に附せしめたり其三也●和漢の文典東西の修辭法により切實に作文法を教へたる事其の四也●以上の特長を具備する本書は蓋し類書中の白眉と云ふ可し

新譯漢文叢書第三編

濱野知三郎先生註譯  
新譯  
孟子 子

本文新式ゴヂツク活字  
袖珍三五形携帯至便

定價 壹圓 拾八錢

●讀賣新聞評 孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄に其本文を掲げ卷末に五十音に基く索引を添へ書中の一語を知る時は直ちに其全文を求め得るの便に供したり其和譯の正當なる註譯の穩健にして平易なる殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なるは支那文學中推して第一位に置くべき者青年子弟の讀物として最も現代に適切の者就中著者の苦心と見るべきは索引の編纂と排列とに力を用ひ此國民修養の一大格音集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりの愉快と

新譯漢文叢書第四編

大町桂月先生譯評  
新譯  
日本樂府

本文新式ゴジツク活字  
袖珍三五形携帯至便

定價 壹圓 拾六錢

●讀賣新聞評 其文章は實に奔放自由を極めいつまでも生氣の澎湃たる不朽の天品世界の大文學書である……製本亦堅牢と

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚮きに日本外史を譯せられ、今又頼山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず、之を釋し之を評せらる、徹底の見、老熟の筆明快を極めて、渾然として桂月一流の名文となり、朗々誦すべく尊王の詩人、又愛國の詩人として古今に獨步せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ、以て日本歴史を知るべく、以て士氣を鼓舞すべし。日本男兒之を讀まば必ずや案を拍つて起らん

東京市東本町 發兌 至誠堂 電話 三六六番 局本東 三六六番 六四七番 番

東京市東本町 發兌 至誠堂 電話 三六六番 局本東 三六六番 六四七番 番







新譯文叢書第二十三編

久保天隨先生譯補  
縮刷全二冊  
演義三國志

紙數上卷千頁  
下卷一千頁

袖珍美金天特製 全入箱二冊 正郵稅各金壹圓廿錢

智仁勇の精華を極む  
國軍男子必讀の書

三國志は支那小説の隨一たる蜀魏吳天下を三分し一代の英俊豪傑亦茲に集り智を争ひ勇を闘はす實に天下戰亂の一大奇局たり支那文學に造詣深き天隨先生新に流暢なる快筆を揮ひ險澁なる原書を譯して面目を一新す巻を繰れば髮髯として刀戟相摩するの聲を聞くが如く光焰萬丈血躍り腕鳴る必ずや案を拍つて起らん

新譯文叢書第四十編

濱野知三郎先生譯解  
大學中庸

縮刷全一冊

袖珍美金天特製 全入箱一冊 正郵稅各金壹圓十六錢

大學は儒學の原理を説明し中庸は孔門傳授の心法を述ぶ共に千古不磨の經典たり本書は何人にも分り易きを主とし本文に訓點を附け更に總振假名の讀方を示し次に懇切なる註釋を施し本文は新式ゴシック活字を用ゐる上欄には原文を掲げて對讀に便す常に本書を讀中せば人格を成就して必ず過なきに至らむ

東京市東本町三六六番 電話本局六一六六番 振替東京一七四四番 ● 發兌 至誠堂 ●

新譯文叢書第九編

久保天隨先生譯補  
上下全二冊  
水滸全傳

袖珍美金天 全入箱本

袖珍美金天 全入箱本

水滸傳は實に支那小説中の隨一たり唯憾むらくは未だ好譯本を得ず坊間流布の書は馬琴儘に筆を十一回に絶ちて十中の九は高井蘭山が岡島冠山舊譯の錯誤脱漏を踏襲せるのみ豈日本文壇の一大恥辱に非ずや我天隨先生深く之を慨し拮据數年茲に譯本新に成る先生が支那小説に造詣深きは世既に定評あり其譯文の妥當にして流麗暢達なる固より辯を俟たず波瀾萬丈骨鳴り血湧くの快文字は本書に依りて其眞骨頭を傳ふるを得ん

新譯文叢書第一拾編

大町桂月先生譯解  
全拾冊  
論語

袖珍美金天 全入箱本

袖珍美金天 全入箱本

孔子は世界三聖の一也論語は孔子の遺訓也東洋思想の本系也日本道徳の教典也論語を解せずば東洋を解すべからず論語我國に入りて既に二千年我國民は能く之を咀嚼し之を活用せり孔子の教は本國に行はれずして却つて日本に行はれたる觀あり然るに世には所謂(論語讀みの論語知らず)なる者少なからず道徳の根帯に古今なし唯風俗人情時勢の異動を察して論語の眞意を解するに非ざれば折角の經典も死物となり害物となる論語を解くには活眼を要す大町桂月先生心血を瀉ぐこと二年有半絶代の快筆を揮ひて活眼を以て活書を心解し茲に新譯論語成る譯するのみならず之を詳解せり先生の眼識筆力相俟ちて三千年來の經典新に明治の世に活躍す

東京市東本町三六六番 電話本局六一六六番 振替東京一七四四番 ● 發兌 至誠堂 ●



侍從次長兼 伯爵德川達孝閣下述  
皇后宮大夫

# 國民道德訓

▲裝幀 川村清雄畫伯

四六判特製美裝

定價金壹圓貳拾錢

郵送料金八錢

德川達孝伯入ては雲上奥深く常侍補弼の大任を拜し、出ては日本弘道會長として夙夜國民道德の振興に努力せられたるあり、八面玲瓏なる人格、該博高遠なる識見、誠に一代之師表として聲名天下に轟き、朝野其の徳を欽仰せざる者無し、本書は實に伯が滿腔の赤誠を披瀝せる憂國至誠の結晶にして、國民道德の大本を訓へ、青年士女の爲め懇ろに處世の要訣を示されたるもの、老幼男女を問はず、苟も國民たるもの、必ず座右に備へ日夜誦讀して拳々服膺すべき、貴重なる國民寶鑑なり

大内青巒先生著

▲裝幀 大内 齊畫伯

# 處世之道

苦しむも一生ならば樂しむも生涯なり、苦中に樂を看取するも五尺の内體、樂中に苦を除却するも五十年の生命、何ぞ遠に貧富、強弱、迷悟、悲喜あらゆる一切の執着より脱却して、悠々自適の處世法を學ばざらん、著者曾て賦して曰く人生行路難、步步酸に堪えず、彼の觀音の力を念ずれば前程風月寛しと蓋ばさ中、樂を看取し、樂中に苦を除却することを得ば、大道坦途、悠々自適、以て世に處して大過なきに處せしむ。此一節能く箇中の消息を闡明して、深切、叮嚀、來つて此の要訣に聞くところあれ

菊判特製箱入美裝  
紙數七百五十餘頁  
定價金七百五十餘圓  
郵送料金十二圓

東京市東區本町一丁目 至誠堂 發兌  
電話本局三六六番 東京一七四番

加藤咄堂先生著

▲日常座右の寶典

# 修養小品

四六判特製全一冊  
紙數五百八拾錢  
定價金壹圓貳拾錢  
郵送料金八錢

修養の問題は古今に通じ、一句坤乾を定め、一言天下の法となるも、其應用は時と共に異にして新らしき時代には又新らしき修養を要す。本書は著者が多年の研究を傾けて新時代に適應すべき根本義に據り、現代生活に必須なる力の修養を絶叫し、活社會に活運動を試むべき素地を示し、或は古今の學說を紹介し、或は東西の事例を引用し、之を行るに瀟灑明快の文を以てし、珠玉を錦繡に包み實益を趣味の中に寓し、別に心學を提唱して通俗平易なる道話を試み談笑の間に甚深の理を會得せしむる著者獨得の手腕を發揮す。請ふ一本を購うて其言の誣ならざるを知れ。

大町桂月先生著

▲完全無比の國民道德經

# 修養の礎

菊判特製美裝  
紙數一千頁全一冊  
定價金貳圓貳拾錢  
郵送料金拾貳錢

歐米諸國の家庭に聖典無きはなし、我國には神道あり儒教あり佛敎あり武士ありて道德の基礎を爲し居れど人々月々必ず備へ置くといふ經典的修養書なし。先生修養を説く數十年茲に見る所ありて本書を著はさる。日本國民に必須なる修養の條目を網羅して之を説明し、歴代賢哲の名説を録して之を評釋し、各條目毎に古今の實例を擧げ、名文名詩名歌軍歌琵琶歌迄も引用し修養と相待つて趣味津津々々々々をして感奮措く能はざらしむ。名説實例は漢洋に亘るも我國を主とし古來の訓言は一も漏さず、以て國民道德の由る所を明にす。眞に月々必備の修養の寶典完備せる國民道德經也。



















# 家庭必備の良書

東京小兒科  
病院 長 醫學博士 瀨川昌耆先生述

## 最新育兒のをしへ

菊版特製美本全壹冊  
定價金八拾錢  
郵税金八錢

凡そ家庭にありて育兒法ほど大切なるは無し育兒の法を誤れば賢なるものも愚になり強壯なるべき子も病弱になり終に死するに至る育兒法を知らざるは親の義務を果さざる者と云ふべし本書は小兒科専門の名醫瀨川博士が最新の學說と多年の經驗とに徴し丁寧懇篤に恰も手を取り教ふるが如く小兒の保育法を説明せられたるものにて總て是れ育兒上實地に適切なる金科玉條ならざるはなし殊に卷末に附せる牛乳保育法は是れ育兒上の最大要件にして博士の心血を凝じて研究せられしもの行文亦極めて通俗平易何人も一讀了解するを得べく實に家庭の一大福音なり

東京小兒科  
病院 長 醫學博士 瀨川昌耆先生述

## 小兒病手當法

菊版特製美本全一冊  
定價金六拾五錢  
郵税金八錢

小兒が急に發熱したり下痢したりする時に醫者の診療を受くべきは勿論であるが如何なる疾病や過傷でも醫者の來る迄の應急手當が宜しきを得ると否とは治療經過に重大な影響を及ぼすものであります本書は斯道の大家瀨川博士が多年幾多の實驗とあらゆる小兒病傷に就て日常心得べき手當法を極く解り易く素人にも行ひ得るやう説明してあります愛兒を有つ家庭には是非本書をお備へになる事をお薦め致し升

東京市石本町 至誠堂 發行  
電話 三六一六 本局 六六六  
東京 振替 一七四六 番  
東京 振替 四七四六 番



340

36



終

